



発行所
 公益社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
 E-mail: info@kokubunken.or.jp
 月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

「日本」を学び、「日本」を語り合った三日間

千葉県柏市で、「合宿教室」開催される――

合宿教室《主会場》運営委員長 池松伸典

「第六十四回全国学生青年合宿教室」《主会場》は、四十八名が参加した五月の《熊本会場》(あしきた合宿研修)に続いて、八月三十日から九月一日までの二泊三日間、千葉県柏市の(公益財団法人)モラロジー研究所内の「柏生涯学習センター」に、学生・社会人ら七十七名が集って開催された。例年は人里離れた景勝地などで開かれて来たが今回は交通の便を考慮して、柏市での開催となった。都心からさほど遠くないモラロジー研究所の広々とした構内には、大きな樹木が生育し、緑の芝生が広がってゐた。自然豊かな構内は、「短歌創作」のための散策の時間や宿泊棟との移動の折などに自づと参加者の目を楽しませた。

まっではあるが、それでは「日本とはどういふ国なのか」を問はれるとはつきりと答へられる人は少ないだらう。合宿での諸講義に耳を澄まして、先人の言葉をたどる中で日本人の心が我々の心に活き活きと呼び起されるならば、といふことを願って、合宿教室の準備に取り組んだ。不安と期待を胸に開会式を迎へたが、合宿が終つた今、振り返つてみると先生方が心を砕かれ用意されてこられた講義内容と、参加者各々の真面目な姿勢とが相俟つて有意義な合宿が作り上げられたとの思ひがしてゐる。有難いことであつた。

開会式の後、早速に招聘講師である伊藤哲夫先生のご講義が行はれた。この合宿の主要テーマである国家のあり方について「歴史的な基盤あつての国家であつて、歴史を否定してしまふと国家は国家でなくなつてしまふ」と語られ、フランス革命の経緯や明治時代に国史を回顧しつつ憲法の作成に關つた先人の労苦について具体的に触れていかれた。そして「日本国憲法」改正の必然性について熱く説かれた。

次は山内健生先生のご講義では、これまで先人が伝へてきた自国の歴史を「いま」を生きてゐる者の合理的な判断で切り捨てていいのかと訴へられて、日本国憲法の不具合について問題提起されつつ憲法問題が我々にとつていかに大事で身近な事柄であるかを示して頂いた。開会式後わづかの間に参加者は一気に問題の核心へと導かれて、初日でありながら床に就く頃には数日が経過したかのごとき錯覚さへ覚えた。

二日目は最初に西山八郎先生から「聖徳太子に学ぶ日本人の心」と題するご講義が行はれた。丁寧な先生独特な口ぶりに導かれて、維摩経を説く太子の御声がおぼろげながらも聞えてくるかのやうに思はれた。さらに古典を学んでいく上では言葉の意味以上に感じたものを大事に心にとどめておくことが大切であることとご体験を踏まえたお話もされた。

午後には森田仁士先生による短歌創作導入講義が行はれて具体的な短歌を例に挙げられながら短歌創作の原則や意味について話された、そして若くして亡くなった大学同期の山根清氏の遺歌を紹介しつつ、歌によつて心の交流がなされることを話された。その後、短歌創作、創作短歌相互批評と進んでいったが、参加者は自分の心の動きを言葉に表現することの難しさを実感すると共に、心を表現してゐる言葉の重みを体験的に知ることとなつた。

また二日目の夜には、「日本の国柄と皇室祭祀」と題して大岡弘先生のご講義があつた。御代替りに伴つて、この秋に行はれる大嘗祭に代表される皇室祭祀と天皇陛下の御存在が日本の国柄の特徴であるとして、その祭祀の時の様子を具体的に説かれた。陛下は天照大神をはじめ神々祖先をお祀りされることを最も大切なお務めとされて、連綿と続く皇統を守つてこられた。さういふ陛下を国民としてお慰び申し上げることの意味合ひを改めて思ひ知らされた。

閉会式前の全体感想自由発表では、これからもつと日本の歴史を学んでいきたいといふ学生の感想発表があつたが、ここで一緒に学んだ仲間と今後も連絡を取り合つて共に研鑽を深めていってほしいと切に願つてゐる。